古今奇談

東雅語

二

2223

古今奇談繁野話第二卷

三　紀の関守が霊ら一旦白鳥と化する話

往古いづこの世なりし。紀泉のさうひ雄れ山の関と山城百次郎者なといふ家よりたつて是を守る。多の家僕日次を接く関をはたし。百次郎深く生れ武く。平日撫代ぬ。て外の楽しみを要めず。み祖上より家を義せる一張の弦弓あり。鹿島の数矢ぐろよりだみあるを射あてどこいすみ。中る所ハ皆羽を徹で一筋を繋る。近村四隣れ禽獣ども獲らるとこと幾世幾年とも不知。家よりそれとんくだれるともたりうらとも呼なせり。百次郎家ハ古く。一族屬にたるるなり。今ハ音問えぐる大和の国人橋の村雄とて人の求る雪石親の家をうもりて家を乞まと。素と貞て紀の国よりたりて扶助とをふ。百次郎ハ男を抱へ娘ハ男を抱へ娘ハ吐一歌とする。雪石はすなとして温柔なの人なれど。百次郎ハ呼びて

宜人求ふこと。居ることハ隣代ハ出る所ハ馬となりて猶と。或所ハ男所の模因を我が代動となして便なる事多し。雪石が女房小蝶。年もとくけれ清く所。紡績の業よりて衣服をとる人ぞ。ろく陽人き添ふ。そもそもなくぞ糊にぐめりるなり。其居所の取ることみるいさだよく。洒掃に仏式用ひ。ものぐ。後めたるさぬのうへ雪石の国代出る所囊中よりおありてこそ人皆ぞ。百次郎初て雪石が居所へ訪ふ。ものぐ雪石ハ呼び仏のぐ。答意をたぐ。奴僕ども。何をりけせん。素も仏若しく竜よりあるうて須臾より十餘枚の薬餌を造る。ほき清器より擬葉為て盤出し。雪石清しも態動より是をすむ。百次郎を合ふ其者ふ。うてしく味田舎のぞよあるぐ。是より第代下して御語を素し。時客位のぐ。向いて。百てうんなでうの多べき。是ハ切ぐ。てて。御居とし立奥ぞる氣こい。移間

なるゞ中に媚ありてなつかしき素性なるべし。雪名も此女のみなることを記さ
ゝまれば故ありなるべしとぞ云る。是より名を来りて四方の雅詩
をかゝるきこゆ。まゝゞ広でそなくをゝしみなるゞにつゝしゝ云見る
所不良ゝれたりてをとゝし戯をよゝ色情を含る詞乃綴言あけ
ど。女何とも思はぬさはなり。雪名えう耳よとでめゞあるの雪名の
関よ行多る式窺ひ知そは而よ来る。女房獨りありて仮なゝしゝ色ひ
りん。離れひきよとてるあゞゞに身とかくし音せゞある。昔より美女
のかゝるゝハ見へんゞるとゝなる。みゝ広ねどゝ有りん白くふやうるゝ美
炎の庵乃下よりうゝ人きゝるゝにゞよゝとゝやさゞうよりやゝ抱しを
めて見を凌ぐ。女服ゞゞ力を極めてこゝと式拒ぎ。於たく奮いて吹
ゝるゆひあるゆゞとゝてく女のちかゝよたゝゞ。汗なゞれて雨の
おゝく若がいざなひよ従ゞをゝとゝつりて云見式振舞欲急一

於ゝて。哀むべきこゝにこそゝとゝつ。其彩を傷然ゝて人の広式傷
まゝ。云見あゝゝみて泣ゝ哀むべきと問ゝ女云外ゝゞを雪
広の哀むべきなりゝ。れ一枝人のゝよゝ亦れ親属よりこゝ。別
夕に相れゝ憂よ楽ゝきにかゝゝひ法ゝゝあゝそはゝれなゝゞ
泣ゝあるゝかくゝ人よりゝふ身ゝるりてはゝ式をゞに保ゝてあさゞ
ゝいあるゝむべきにあゝゞゝゝ。君いさ而れ勢家ゝて我よ勝加婢妾
多あれども眼中よあゝゞ。別等猟ゝにて楽ゝ今豪華れゝるゝ。今
雪広いゝよ居ゝてる貪士ゝゝ。我身君れゝふ粧さんゞ。是富炎
をゝて美人と奪ゝる。豈大夫と言べゝんや。云見世語を文て孫ゝ
式よ收て女を引立ゝ式拝て云。我一時乃暴悪義後を忘ゝ初ゝ
ゞや。尊嫂ゝゝと流水よ附して胸中よ浸ゝ事なりし。我あ
ゝ事よ二会を引ゞ。是ゝゝ式ゝ猟式。晴よかりゝるゝあさゞるゝ

と。若よりひとつゆへてもぬ。其後雪石ゞ家をとゞめよゝしもゆへ
ぬさはかり。女も彼よりかてゞかう笑ゆ。扨い女ゞ我ゞ乃に面目とつゝみ
りることをうけ〳〵と言る誓ひも壊をやすさいひ道。実るられ猛
き人の腰おれもなるるゝひ。彦四郎〳〵ら石よるうして。日ぬ敷
生もたくうて猟狗い黒れ犬し殺あそび。石ちれ猟ぬ者も休息
よ近座をそれのこるゝず雪石よりくしして風月のあるんをよせ
彼を賞し景を歌ゞ。人なれひまん女云むゝ〳〵掃部をうねやうる
るに後世義をよゝげまうしく。おの〳〵天〳〵栽る丈夫ありておゞ
の浦乃こるをゞに石よはゞゞ災をかゝして君れ求ゆ人に縁あり
ゞ。我よ赤縄乃郷あり君ゞるよ彼紙をゞし。彦四云。我年来射猟と
ぬこ用く奉をしてつまゞ婚を談るの会るゝ。錦部の高向太郎
女よあり。容儀れゆへ高し。孫よ彼い其家ゆ稽家ゆ仕ゞ。結く

婚家となんなたがひよ恥しかくれぬ蝶云まくいんねあり為どる
為べし。左目次第怪びて行んごろふあつくてうつぬ雷ふ口くと変
てなやをくうけびひる少を用ふ妻矣て其ふ遠ひくれ近きに有
我和目眼痛あつし附ふ行て治我求ある醫女刀称ふのこる向れ女
るれ眼疾を療どそよう為ふ親しくのへで行うなんべ足を備
とるしてあるれようて合せんて仕そんどはしきあして刀称る許
に行て托こ調ろれべ刀称る称部ふ行て往わるふ除こ姫をこ山に放
れ結びむんや足相為の縁ふるんとらんふまゆて山に古家なう
我頼陀とる和なんども今の左目ハ妻豆の殺せふ痛ることを使者乃
やうふ人いんど我矣て欲せべ刀称ふ云実ふ事あるとこども今ハ全く
痛をとどゆう為ふとふ事を悔て優ふやちきふどさみふんをど
めらるようぐるえしく痛ろとてあひをんらべらぐるしてれあう

べし我婿によりて恥なれたのをなりし冠を解て山口に衣冠雲鬟をむ
て音問を通し往来く婚姻を調へける。是によりて衣冠一人あつくす
事の沙汰しけるかど。雪んは夫婦衣食欠てなし。衣冠婦絹をぞ
て小蝶の衣服の料に贈れども。生ほ彩衣を製する事を好まず。その
絹布皆刀様子にかへり。他が綺羅衣を換ねにして服用す。是なん名つけ
の人には異なりとぞ。人もつよあり。夏には泉国の綺羅族登臣に夏人
とよ富民あり。親るすまの代より堅く殺生戒つまし。然て夏人に
まても是せる法助るをいそかし。他人の殺生をさへ諫さとて体し
む。女房は後の母の若に嫁しける所まで出生て女を具して此
家に嫁しまつり夏人に配するそ。盛に髪を結ひけるよりのまいぬ。
別て女乃ふかしくて。夫とたのみけそ家を治めれて夷のれ会つ
依てしなし此かぞへは十とって七となの秋。なよび寝ける

夫の髪に妻かゝるしみけるが。年ごろくおもひて中途に
捨ぬるは。妾の情もしぬに似たれども我は母なる人の志をつぎ
一類の為に逆なる所に行も人ば。今より長く別れ参らせん。此
一承紀念にとど留め。我かひをかなしてよな汝も見て。盃を枕
にそへて立あがり。なれたれ回顧て放出のかたへ出ゆくとて又
然るれば女はなく枕上にある一張の弓をとりて参り。浅ましと
足ずりして落る涙の水とさともの空蝉なりしばかりなりにけり。其
いたで火をうち消るがごとくにて何をおもふべくに尋ぬべき。其日を
かぎりの日となし。供書たてまつりしかば弓と傍に立おきて胸に執ては誉
に携へふれせず。手に馴るがごとく二年の月日ふり来て。ふと忘んか
たとの主の誌日ありと胸とく起て席をととのひ。此弓を客位に立
よせて早膳を供じ。又もも同しく對ひ合ける所に。此弓忽羽ふ

つねとして白き名ふ変じ龍出る含睛ふ座り遊出そこれば蛮
をさして龍行。其方を目よりけつきそこひ行ぐてぱも学ふちら
く紀泉の堺ふいる。傍なる大木の高枝ふ住りくる白き名有。そ
なりんとこあげくるんやぐて龍ちり変人ぐふ学るにいろそ原
の良弓と取式人にあゆくくと変くと疑つきたづくく其慶ふ
跡立ゆすらふ而ふ雄の関の侍ども五三人来うて持くる弓を
足こめ取囲こて大ふこどあ。其ら何くくて法ぐふ入てくるとる
ちり問ふ変人方のまとかくふ侍ども行くにけるどがるあゆ
ち紀分法こそ名ねどくくと先法日原ふて其上のくくこひこそ
と変人と中ふれ四て行ぐんにいたるゆと安きふふ。かくて
法日次くハ彼渇まる仏の底をみがくて用る社ぐんにすくく我変
光をこそきるど。女れふて気むくくあくんと折気ふよりそて雪名変

奴とまの紀至変京名をたくく行。山海の珍味をあろ免て。冷膏安
を一日対変ふを尽して彼をなくまぬ紀むくんくるに。女も紅ひと
凝くてへ来り既ふ客原ふくくうて席ふ進こ上座の型ふうけくる
猛虎の行を伺くに見ふ咆吼をる勢ひ。眼光人と射るがぎ紀ふ
媒一目ふそあくくけびて座ふ龍くぐ急ち狐とれくく薬師とと
行ぐくくくぐなりぬ雪名見章学ふくどもひとがくくるそ食
を恥く逃ひくくんくもびぐ身ふ名くる小袖ハ学むくびながく
脱の売。単皮ハ名くくくて極ふ遣て。琴のかざりも落ちそひぐん
かざりハなりぬくと思あくくれふあくくて面こん合くるのくなり。
庄日次くふ今ハ何とうにまんと我ぐ跡ふのとだくくくく学くくく
雪名ふかくくう。女ぐ出身を引くて雪名いふぴ女房ハ其くで免逝函
より賣来るを親なるの買ふくて婢とるに我くくたちるくくそ。

親乃さびしがりなんとて妻をとりけるまざるゆへ、ひくうと成まして遠くさはよしあるにたよりをたづねこゝにさもあらんなんと、山虎の倫い彩華なれども百府川喪の秀逸高向左馬頭を婿にまとる得させ、おなじ恐まして本郷を家つとして画真のまゝこれ所の名やしなるなるべく関の者ども夏人をれかこみまて右のうを拘糸をぞ左目ひそそ大よ怒るに雪ふるよりひ。其うこそ我家よ近上が他へ行ら尊敬してたこれうとこそ範唐やうなんでうつうしもしをを家のみ多いろいろとるありてたりかうしとゝ様せうぞうをんく猟をるに拘このみしとふこれし。近ふい婿こそ涼くれさあかれ苟且よ用ることれし。ゆや久しく教せんたこうて箱をしいうぶ此教ようう白狐れ求衣の用こうして近国よ命じてぼよ予家射猟をよくもる成ふくゝ孫ゝ孫ゝ狐とおゝ矢ゝよう。吟る絹成開くよ

弓をこんぞ。家人の四よ盗ことうし者あるやと捜ゝ求むしこと急ゝう。其方をゝろ盗織ゝもゝ人ど。懐しき分説ゝるゝこゝずとゝゝども。今国和ゝこさるこもあまゝぞ世の中怪るゝ所ゝ推べきこれあらず。其男ゝこゝんをき本国よ人を遣て其身許をも受ゝ。ゝと。ゝ白ゝ皆ゝ毎成掃て教ゝゝる。其教ゝ左目ゝ爰よ小蝶ゝゝて云ゝ。我母とゝゝも同ゝ狐よゝて。ゝ爰の長者ゝ。みゝ春爲ゝ命を免ゝゝる。其ゝ爰なゝゝ。其報ゝゝく彼ゝ家よ掃搭成とゝ猟旗乃山の関守ゝ教せよ跳ゝ成制止せんとの念ありて遣せゝ。我ゝ念を後て先祖ゝ寶弓をゝ隠ゝ。我身のかゝりゝゝてゝく爰人よ殺ゝ。大れなる雪ゝ左をさゝひ出ゝ山ゝよゝ。係ゝ魂を遣ゝ免て漸く教せ成ゝゝ免ゝ。ゝゝゝ事ゝゝゝゝ人ゝゝ白狐を猟せらゝてのゝゝゝさよゝ。ゝゝなゝゝ人の言伝ゝて。狐ゝ何の寶ゝなゝす。

き。服下の皮を縫あるせて名白狐やうなれども。猶よ煎くして服治に堪ず肌不平なり年經て白狐となりしい毛落皮拓て裘とゝをて笑覧るし。此ようしゝ公よ告く狐白裘の用なれるを語しもの。去ても靈なる狐彼名弓亟よ他家よこでまゝず。自ら死ぬ山口の家よ喫ふ。祟るゝる掛画。虎威眞よ逼りて我が多年の亟変を破ふ。是皆狐の実報みて我が力よ及ざる所なりと。其秋同じ夜の初ごろ。名同次郎雪名友人もたゞゝ一詞なれども其一狐の祟ふりて三人揮くの仏機を労しめ。其拓本は名同次郎れのまゞ報生より事れたりあれどもとぴ弓を長く庫裏よ拓ゝ。其位よあゝずして名無の猟をるすは公と潜もるなりとぴ弓ゝ人やゝきりて再び報生に拓ゞ。雪名友人も遂然をれるゞ。女房を墓ふ仏のやまざりなとべ同じ名同有興ひくるん喫

ゞ

引ゝ祭しなれゝの弓のつゝのまを名人べ若生れゞをゞ

雪名もくなりひゞくそ

なゞれてゝるやゝろゝ弓紀乃川上の白鳥の実

友人

那りのひ詰ふ迷て紀の川のなるひまるを我源ゝを

二人は本主をゝしるして大れいゞゝ可ゝぬ彼雄の山乃関を

白鳥乃関も呼みるは山謂よゝとゝゝ

四　中津川八道山伏塚を築ゝもる話

足利の世衛一統なゝんとゝ貞治應安比勢到多度の四よ楊清水集

とゝ人文武傳全の史へあるて遠迫逃拓人多ゝ。其中に三年なり

八月る法人字多次郎とゝ者。其人仏拓く人乃報名武之ゞて名言る

が一同人なれバ柔して問て云。世の人のいふなるハ実や。南朝の功臣多かれど四
海に逃し。摂河泉の守護し。従三位中将を贈られし判官楠公湊川
に従族切りて跡を潔し往をのがれて。今も美名とる家則先生ぞ
と云。小生も年比名残思てみんなまふ常倫の要よわらず。此大事
の時節に氣つ合ばとていへども。おのまへ宮秘の官軍矢田十郎義登
といへるものなるが。宮流刑の其身とのがれ生國なれバ此地に隱
る。逃れあさりし由にきかり。爾来土も木も足利の風に偃て南朝
に叛へ。其舊臣たる者朝夕嵩とくひぬるにたえざるべし。先生かも
逃れに忍さば其後なれにあらん。師の律師則祐令揚の中津川
に館をかまへ。赤松附属の地を看る。僕と兵二の舊遊なくて南朝
を忘れざるべし。奥ハ備後の三郎高徳存生して。時々文通ありと
ぞ。まて其宮方の衰敗をなげく。九列の菊池勢微なれども義公匡

せん。誠田義治の方其如式なり。孫ども勢活命なり。今ふて負
弩の人あらば。其後ふ活て馳集る者何式同じうせん。賢愚いと
同ふ揺法実に遠然の体ふて世上の人我を指と沙法をる。疾よう
我耳ふて入りうたども。出和の白なる来場るべきふとあらず。行ることを
なに雑記ふて貴方を始め世の人軍情式知れなり。蜀の諸葛孔
度も祁山ふ出ふ。必ど勝れ術あるにあらん。魏の勢日日ふ活大なれ
だ。仕方無ふて取静めるのみとそ。式者ふて危きに近き
少勢を従て国家式式者ふ計来ぬる相国の少となりていの
ぶ。ゆり仏若しかん。いるる英雄ふもせよ。足程れ命無あれば敵と計
に足まる。我軍器足らざれば足りて仕軍ふ勝べきふ命十分ふる
とふやうなり。其上時変あり兵変ありて千変式ふ出るとも。
老子仏家ふ昔士師乃何某ふ始て描の姓を賜りしふ。菖蒲王

の外戚なる氏。故ありて其姓を継ぎ、ひて八代好古の大納言より枝を分ち樟原にいうてふ身微力なれども宿軍れ太指ふ座を招ざ〜久しき土地の利を得て大敵を引き兵を軍機を我物として。変化鬼神のごとくにして。是皆其時ふ泥て疾疾のゆうう智計を練出し。族士奔れ結忠ようう拒きかせ。智に及ばざるふ利をこせうて命ふ投ぜ。人ょ敵をるも日本国を引受て死をる人分一命ものすれなりしうけ氏君に捧げ。若操なゆあずム力をよ師ょ労し。帰後の時氏ゆて。是利度謀及の初よ〜びいの海ょ走らし免。虜山より還初なし〜なるまで盛名を善さうこと一つい時運のをむよるあなり。ふ未ゆをむけ賞罰均公なし氏。新田氏英雄なりしとゆども。家勢初より微ふして氏ょ対せ氏。既ょ家運傾くの小系をしょどいうしょよる勃興をるれ新

天命の改とる不。明眼よりしれば勝べきの敵よあらばそのう軍利ょに振りうるものよあらばいよりて対氣をたし。時をえのぞうある敵死なり。己ょ嘯ょ正行生ゆ多病ょて病ょ死せんよりいは事ょ泥いんと。二十山ょみて級盛ふれ下ふ敵死しうい孫会なれども。今ょてれば死敵の国をうづさねと好。士ょるものい初ょ其ょ人を選ぶべきこと。せれ大ょりんば黄石公ゆ直と侯を隠て張良ょ取をあるいい。其踏ふ氏用ひよ〜乃教を張しうる広なり。様原初い天命の改とる氏知て者すれなり。氏い命の華をうて氏ふて君ょ報ぞ。公の霊あらば諸者の恩を多ふべし。但し盟ょ楠公と呼ぶ〜古代樟乃宮俗に様と省うる氏楠の字ふ混じうるもまさて。ゆまさる別嘉及し氏れありて時氏を家ょのるべ。是ふ人情なれは悪心

ども。ちまたまでもはなはだそこなへり。西洞の根基とする大和魂の路一統
して基本巣窟なし。今喩起の徒の事を成べきにあらず。故に是
下も手出諸業ちるをなれば。立ひ立するる成り成ざるべし。
てまつやんと。枕にもべき角なる木を二つれ出し。是ハそれ然常に
子息に示を隠密なりと。掛る長刀を下して宇田ばりに接
け。是下年に誠を除して石突をもて直下に突通し試ミ玉ふ。
次に鎌を下になし。年中に冷をる所ありて力にすれ也突下こと。ば
角木貫きて徹まり。又一個を立て突下をなしば度ハ鎌ありて
角木依然たり。次に問て云ば。右の前が主どる。然を備云。其常き
通りたるハ内密にして相れぬし。志力強き附ハなるべし。後の要は
ざるハ中外なく純本なり。孫武子が突とするもの代どもいふもの
是なり。おゆべゆに其兵を換す是ありて隙に隙んで一時れ突をいふ

なり。今れ世の如きハ實窮となりおすべきの時にあらざ。或ハ此下窮
なるときに堅くして通ずれば。突なる方要るるが如く変卦ある代ゆるん
で事成就をなべからざ。人情もなく。初勇氣ありても一たび利を失ひ
ては勢折け始終を保がたし。兵書に始ハ處女の如く後ハ脱兎
の如しと云り。脱兎ハ處女の既に破身したる代口悪ように言する其
比乃様説なるを。孫子取て譬とせりと。彩田應雜説に語りまひ
し也。張将の勢も放し来りて八魯縞の薄を通さぬと同意
なり。是下の如くいひたりよるもの。勢を用ひせずして。然用
の時は気勢なきものなり。ばよひものてひさでは是差が
諌に従ひまへと。理状せずて蒙を穿の詞に。次に赤面して立服
せず。彼がらけがはざるハ是非もなし。秘密事をかくろてはます
に取りかさしく彼長刀の鞘をさそし。など。つらんとする附れた系

早く後の一間に入りて戸を引立より。一重の障へ抽りは突急さん
と突長刀の将棒より屈伸えまば鉛刀なり。かかる所へ門生翁
人へ来り各様だ。何気なく貌を正しくし。学士に剣を我りは
授くあでき事なりしと。立出んとする時。だ差湯出来て再びいふ。
は郎你えよ。清平は世事に用立ぬ大人ハ徳を害ひ小人ハ必ず
通なり。用ゐとして安き所へ鉛刀に論無。動ハ止るよしるさず候べし。是愚
老が足下を送るの辞。今よりは永く絶をべしとて次郎甚恥入
り面を低て崩れ逃るが如く其家を去ながら君張が動作無
為の人物なりしは世の人口疑なりしと。我が迷ひてかく其家を足
情人眼中に西施と出をとしすさなるべし。宇田次郎もぞしては
外せしう人は早くも云ひ立んとしまより其身山伏の姿に於て後
延の住吉防へ古は知音なれば、こそ彼に到て其身の動静をさぐり

果。何とぞ則効入為に一面せんと中津川に立ち入る。るに。塁高くかく
げ。高門大補厳に設け。處々に水泥塞まる舟を、並べ置は乃
鈎数多挿て火災に備へ。門内の白砂足入まるに奥ふかく対面なりと
も迂活に入がく。看門の者に向ひ。某は園林と申術験道也
先年密教に気せて時節主人に朝夕伏侍せしれ本寺山にある
しが。上京の路次懐旧捨がたく推参仕るき。此事次て玉わるべしと云ふ。
看門心ゑてやがて入て其をる程に。入道誰なるやと一廳に請へ入ぞ
立出見ゆるに。年隔てぬれども見覚へある矢田義登なり。
然ぞや恙なかりしと。詞を親くし茶烟喫せし然酒合を設。
従妻めぐるにつきず。住吉防に宿をとれば。みてて系らんと其日は何
事なく辞して帰りぬ。日を隔て再び到りしが。も疏意なく
相待して。酒合に席を同じく喫し。昔よかはらぬ気色をみて。家些

膝伏をうをのてアハ面刑乃股肱義よ宮の眼近改をうを海し
ぢ伏生た人なり。時うう代ろう感傷よたんをとして入るも嘆
息して宮の御謀反寃ハ叡慮ようを出て却て智伏家よゆづう
せ玉ふ例のまのうらうを君命なりしぞよ。見たうなかうう造
紀の自拙のうるて不なり。義登云ひう日夕ふ歎懐をかさん
しとかのまハ今ふ云まど。実君ようめんとして我も人情況
きざる不なりも隠居して世よ為らざ為ハ日ふ月よ其情
うなく。義ぞ周公をえ玉いざりしなもしをひ。義登云
僕ハ行略も回復の念やはぞあるれ昔日のようをを云まを加祖
あらば。日なしずとを伏参ん。実君ようえ諭玉ひん。今勢州
満れ云清と変名をるハ。ぶく補判官とえてう。彼さ、男正勝
衰ふたも狂ふ劔破を守る。奥路よ四海ふ為ふ法あり。四国よ義宗

ひとしきりの。然弥十津川内に変せば。誰とも一とび義を頼り給
なんば朝せばして居るの多のんこの中より入道面をか
まり。義登をこぞりく待ける。此事我館にて詰べきことにあらず。必
ど無用とうべし。義登面温て云。貴殿身の逸楽に安んじて稿を
捨ること。人の會釈に異なる所を知るやと。早悪言に及べ。乃実
ふ思びを既に去れなば。さんとせーば。自ら殺し胸とさ
をりて云。拙老は変にあるへ。追隠に似て実は以外厳れる武士
をなすなり。其様なる山伏来りて我に会んとはさん家人等
疑を起さるなるに。かる論詰に時を移して互に人怪なれば
あり。只今徐を送る使を住右防の方へ行て詰を立んと。
義登を促して庭を立しめ。其身は一個の僕ぬをも具せば。
脇乃門より出面に向て去まりぬ。乃ちがうこの中。義登

你と我と舊識なりとて人ども忘れ給ふ隔をろして君子匹夫の
遺あり。匹夫は君子なれば我如ごとて人ども君子は匹夫をとろる
易し。義登公始りて我いるる所ろ是匹夫なる。人々天下の
善をなせば天下を利と是君子なり。人分の名を成るなれば天下
に害あり是匹夫なり。近年天意亂に倦て治世よりの蓋
ようみろりろろひをなり。四方ふ弓兵を勅とあなれよ你一人
有会を立て自ら憐を使くせんと欲して乱を唱ふる。遂ぐ
あるねども紀まで風かつて激しの勢となるべし下を震動し
人民業に就て我ねど天兵一たび除んで所甲も為ざるにい
る。你は一旦れ義勢を振て後末の名欲を死とろとも笑を含
まん你ごるふいざるまれたらん衆百の人命を活し安と笑へ
しめ其衆皆你小版を老夫日は世の安寧を嚴成ようと
まば匹夫なることを免まず。拳既三尺神ありて隔壁一層人耳
多し。再びさを立てなりん。今拝老を長三の力とられひてさ
らんとも旗せざるごとく世の人もみたうんぬとて以つまてこよ
融寺の南門を彷徨て位右防を拉ちくなんどの牧もしげ
なれ入ることは道して彷なば彼防も我を長々人の中ふ
だしとえ来慈虚れ義登よりくへたをお拝まとべし。義
の尾と右汲をこのる人遠き所を調をも掛どせるしく切つけ
ふ。へたるる死のきて拝あるせよ。ろ開つ三度せ。ぐへた
烏兵を迷くとてとびてたてくれ切つけ切倒し。傷まし人ども
世れるふ害成のぞく自ら你ぐ為を拝ゆ刀れ血押拭ふ
白ふなる神祠の教げよ。一人の農まを鍬を拝よ。きて承ひる
ぐたろ来まて立れ成ふまべ中津川よ新系の下紀なり。厳

の単身にて出まゐりてんやりせず。こゝ[illegible]の所位せり
とて。其体ものすごくへたばりて。すれざるかのまゝ猿知
恵はてれば根絶を世上よりさん力次よふ怒るでこれく
引ける事なるて多んで此男制止す。我い倍居あるべ
鹿毛ーもなくてへたにきてるるーて乃氏おきすこーも
油汗せど。其時此男懐中の嚢より安堵の所書と出て。ふ
あるて又とる。所要付行きなく何この那を充行るて某家
那部新左衛門殿の家。こと形の面方表へなまとも高名
多し。中津川入乃今京都の干城をなすも其本心いまだ
知るべうしよりて某まつて貴侯の家より竊候とるす。今
事多かゆへ姓名を技家をとゝ赤松力と改め[illegible]敬
て。矢田十郎ふ説る利害の旗を諸とべ長那部も甚と

も成公論と稱し。其下の本心ぬければ実完よ其とそ
だ[illegible]ば。それをゝめてれてゝ[illegible]ん。此事根絶し同僚して
中津川よりぬ入乃矢田が右氏情ゝ。住右所家ふ不の者よ
今ゝて其地の場田よ埋め土を築き石氏結ゝ[illegible]時の人
足を山伏塚ゝとゝび名るゝ。其後雲陀ありくい塚み
出没とる氏ゝる人多し。又雲火ありてい[illegible]と出捨と。怪し
ゝとゝども害をなゝゝ。偶ゝとゝる人いい必其志和と成
統とゝ云伝へゝり

古今奇談繁野話第二巻　終